

方から批判もないわけではなかったが先生は自ら「居据り災害」と自己反省をしつつその努力を傾注された。

ちょうど台風が一方では豊かな水量をもたらすように、先生が北海道の災害研究に活力を注ぎ込んだご功績は忘れることが出来ない。その一つ一つについてはまたそれぞれ記する人があるであろう。

最後に一つ。いつのことであったか、私と二人きりの時、先生はふと自分の研究に専念できなかつた寂しさを洩らされたことがある。しかしこの二、三年、センターの責任から離れてからはご自分のお仕事に打ち込まれていたようにお見受けした。先生のご健康ならば残された時間は充分にあったと思われるのに、突然のご発病がこれを中断した。誠に残念であられたと思う。

謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第である。

(ふくしまひさお：北海道大学名誉教授)

## 酒井さんの思い出

田治米 鏡 二

少年の頃から大学を卒業する迄、酒井さんは「学業・操行共に優」を続けたのであろう。このレッテルがその後も酒井さん自身に貼り付いていた。大学卒業後の酒井さんは高名な武藤清教授の下で若手時代を過ごした。

武藤先生は研究面においても運営面においても建築界の並はずれた大物であった。「武藤先生のお相伴を繰り返しているうちにボクは酒が強くなった」と自身が何回も述懐したように、酒井さんは武藤先生の運営面の大物ぶりに特に気を惹かれ、忠勤を励んだものと察せられる。数多の俊秀がひしめく武藤門下にあって、此れは1つの見識ある選択と思われる。

酒井さんの生き方は、「優等生」らしく、堅実を宗としていた。航空機による国内旅行が現在程普及していなかった頃の名残か、酒井さんはJALに決めていて、割引の航空券に手を出さなかった。半呑み込みを排して、完全な理解を追追求した。だから自分の考えを説明するのに優れており、講義も得意だったに違いない。

ただし堅実性と完全主義は発見・発明と相反する面がある。研究は冒険を伴う賭けである。少なくとも研究発表には敗北の危険が付きまとう。故にこそ勝利の喜びは大きいのである。次々に新しいテーマを求めて荒野を放浪する類の研究や、常に批判者の晒し物になる研究発表は酒井さんに向かなかったように思われる。

私は酒井さんと違って少年時代から碁、将棋、麻雀、トランプの勝負事が好きで、負けて帰って眠られぬ夜を何回も経験している。テニスの勝敗に青春を賭けた時期もあった。だから論文を発表するのも「負けて元もと」の安易な気持ちである。間違いのある印刷物を世に出すのは公害

であるとの説も承知しているが、間違いは自身又は他人が後に正せばよいとの考え方である。間違いが問題にされるとしても、問題提起の役目を果たすではないか。私は青年期に読んだゲーテ詩集の巻頭にあった「私の拙い作品を早く世に出せ」の句から勇気を得た。酒井さんも私も正義漢であるが、両者の実務面の相違が却って両者の交友のバランスを最後まで保たせた。此のことを酒井さんは「ボクはアンタとウマが合う」と表現した。完全を装っていたが、酒井さんと私との間で互いの弱点を補い合えるとの認識があったのであろう。

私は酒井さんとの共同作業を始める前年に酒井研究室の釧路市の地盤調査を見学したことがある。其の時驚いたのは、ペンレコーダーが故障した際に酒井さんは自ら修理することは全く考えず、直ちに札幌の業者を呼び寄せる手配をしたことである。器械を修理したり、記録をとるのは業者の仕事であり、採った記録を調べて学術的判断を下すのが研究者であって、酒井さんはそう言う研究者を束ねる大研究者を自任したかったように思われる。

その後のある現場で電気比抵抗法による地盤調査をしたことがある。酒井さんはボクも測定をしてみたいと言って、測定器をのせる台を運ばせ、折畳み式椅子に腰掛けて測定器の目盛を読み、付き人に記入させた。昔の総大将が野戦の陣幕内で指揮を探っている様な風景である。通常は携帯用の測定器を地面に置き、片膝つきで目盛を読み、自分で野帖に記入するのである。

「アソコの調査はボクがやった」と酒井さんは以前の話を時々してくれた。しかし当時の酒井研究室にはそれらしい測定器も無かったので、「やった」のではなくて「やらせた」又は「參加した」であろう。

酒井さんと私との地盤調査の共同作業は10余年続いた。作業に伴う事務上の手配万般を酒井さんがやり、作業と調査報告書の作成を私が受け持った。酒井さんの手配には手抜きが無く、関係機関との打合せにもそつがなかった。泊りがけで酒井さんと共に調査の下見にしばしば行った。酒井さんは旅行そのものを楽しむ術を心得ているので、調査の下見は何時も私に思い掛けない楽しみを与えてくれた。現地に向かう途中で昼食をとる際にも、単に腹ごしらえをするのではなく、その土地の味を賞味するように心掛けた。

現地からの帰途フェリーの波止場がある漁村で一泊したことがある。打合せを終えた後の気楽な旅だ。夕食の際に酒井さんはいつものようにお酌を呼んだ。その村はお酌の専門職はない。漁を手伝う近所の娘さんのアルバイトとのことである。じっくり飲みだすと酒井さんの酒には際限がない。でも清い酒と言うのである。ちびりちびりと杯を口に運びながら、とりとめの無いことをお酌と何時までも話している。ただそれだけの事だ。「此れが土地の名物か」と訊ねてちょっと箸を付けるだけで、酒井さんは食事には殆ど手をつけない。私はさっさと飲み、さっさと食べてしまうので間が保てない。酒井さんのお守りはお酌に任せて、私は中座して先に寝てしまうのが常である。お酌がいると私も助かる。翌朝の出発間際に昨夜の娘さんが普段着で野草の花束を持って送りに来てくれた。

全国組織の自然災害科学研究班が発足した時、私は佐々憲三先生から「北海道の班員を組織するよう」依頼された。当時の私は教授になりたての若輩だったので、他学部を物色して、工学部の真井先生と農学部の村井先生とを柱にして研究班に参加して貰えそうな人材に集まって貰った。

その人々の中に酒井さんも居たのである。曲がりなりにも班員の組織が出来た翌年に北海道地区は独立し、真井先生に初代地区部会長になって貰った。しかし真井先生は1年限りとの条件を出すし、村井先生も尻ごみする。地区部会長を独断で決める立場にあった私は弱った。苦し紛れに2代目を私が1年やって3代目を村井先生に頼んだ。うまくすると村井先生に数年間やって貰えるかも知れないと願ったのも仇頼みで、約束の任期が近づくと、「約束通り1年でいいですね」と念を押されてしまった。その村井先生の次に登場したのが酒井さんである。地区部会長になった酒井さんは1年経っても2年経っても交代を口にしない。地区部会長選出業の私はそのうちに完全に失業してしまった。

地区部会長になった酒井さんは水を得た魚のように生き生きとした。研究組織の運営こそが酒井さんの天職のようである。全国組織の会議にも欠席したことはない。「忙しい、忙しい」と言っていたが、生きがいに燃えていた。私も酒井さんと一緒に全国組織の会議に何度も出席したが、酒井さんは慣れるにつれて他地区の幹事や役員が僻易する程活発に発言するし、発言の内容に筋が通っている。「矢張り優等生なんだ」と私は思った。酒井さんの研究発表は稀であったが、活発に研究発表を行う高名な人を酒井さんはとても大切にした。曾って武藤先生に仕えたのも斯くや偲ばせる。その代わりに大先生の弟子達の大先生への仕え方が酒井さんの気に入らないことが多い。すると酒井さんはその弟子達を叱るのである。おっせかいな話であるが、酒井さんは善人なのだ。でも其のために憎まれもした。

酒井さんと一緒に京都の会に出席した時、鴨川に面したお茶屋に連られたことがある。京大の友人の紹介とのことであるが、暗くなつてから2人で探し当てたので、確かな場所は判らない。間口は狭いが、奥行はかなりある家だった。仕舞家風の家の座敷に通されたが、静まりかえっている。座敷は他にも1~2あるようだが、物音一つしない。家全体が寒々としている。縁側の硝子戸越しに晩秋の鴨川がちらりと見える。女主人が自ら料理をすすめ、我々の話相手をしてくれるが、他には台所から料理を運ぶ若い男が1人いるだけの様だ。ここでは料理を作らず、何処からか運んで来る料理を暖める程度らしい。何とも妙な所である。年増とも言えない美人の女主人は教養もありそうで、もの静かである。どんな人物なのか見当もつかない。場馴れのしない私は息苦しい。酒井さんは悠然として女主人を相手に杯を口にしている。私1人だったら居た溜れないところである。こんな世界もあるのだ、と後になって酒井さんに感謝する気になった。

酒井さんとは一緒に旅行を何回もしたので、他にも思い出が多い。もっと碎けた酒席では、興が乗ると他人にも歌えと言い、自分でも歌った。ただし酒井さんの歌のレパートリーは極めて狭い。「君恋し」の他に童謡1~2である。だから「君恋し」を何回も繰り返す。こんなところは甚だ野暮ったい。酒井さんには趣味や娯楽がなかった。運営の仕事一筋である。

汎用シミュレーター導入に際しては、器械の機能を調べたり、陳情に赴いたり、自ら委員長として大変熱心だった。しかし導入後に自身がそれを研究用に使ったことはない。それを使う人達に感謝して貰うことに満足していた。

私は波動理論の理解を深めたいと思い、定年退職後の2年間を超関数理論の勉強に没入した。その原稿が溜ったので印刷物に残したいと思ったが適當な物が無い。地区センターの印刷物にし

て貰えないか、と酒井さんに相談すると、不賛成の幹事も居たようであるが早速引受けてくれた。私は日頃から応用に浮かれて、テーマを狭い応用に閉じ込めたがる視野の狭い風潮があるのを苦々しく思って居るので、不賛成者が居たにも拘らず、部会長の酒井さんが印刷に踏み切ってくれたのを有り難いと思った。私は今でもその印刷物を時々参照している。

酒井さんの地区部会長は18年続いた。全国的にも例を見ない。余り永いので、全国的な会議において時々問題にされた。会議から帰って地区幹事会での報告で、温和な堂腰さんが意を決して「北海道地区部会長の交代を強く求められた」と発言した。そこで此の議を幹事会で議することになり、私が議長に指名された。酒井さんに中座して貰って、交代を決めた。曾って酒井さんを選んだ私が今度は酒井さんに引導を渡したことになる。

酒井さんには成功の自慢話が多いが、失敗談は殆ど無かった。個人的研究とは違い、運営の失敗は許されないからであろう。私にはその実感が無いが、酒井さんは「教え子」と言う言葉をよく用いた。そして厳しいことを言ったにもかかわらず、「教え子」の面倒見はよかったです。失張り実力があつてのことだ。

酒井さんはいつも気が張りつめて居たせいか、気の許せる仲間を懐かしがった。「藤岡クンとアンタと3人で久しぶりにゆっくり飲もうや」と言った。その藤岡さんが亡くなったのは余程のショックだったようだ。私は酒井さんが地区部会長を辞めた後は地区部会にも出席していないので、酒井さんとも全く顔を合わせて居なかった。昨秋電話で「そのうちに2人で飲もうや」と言って来た。「外で飲むのは落ち着かないから、お宅に伺う」と答えたのであるが、いつ迄経ってもお呼びがなかった。亡くなった後の話では昨年の暮れから健康を害していたとのことである。

あんなに酒が好きなのに、酒井さんは来客の際以外は自宅で酒を飲まない。酒好きの酒井さん宅には上等な洋酒の贈り物が沢山ある。私はお宅に伺うと、しばしばそれを貰って帰った。煙草を吸わない酒井さんに煙草の贈り物もある。奥さん共々吸えとすすめられるが、半年も前の代物で黴が生えていることもある。何によらず未経験とは仕方のないものだ。

酒井さんは若い頃から健康も優等だった。弱みを見せたくない性質だったので、殊更に健康を誇示した面があったのかも知れないが、近年迄は風邪を引いたことすら聞いたことが無かった。今思うと、それが数年前から崩れかけた。暫く音沙汰が無いので、又あちこち飛び回っているのかと思っていたら、年末からひどい風邪を引いて寝込んだとのことである。こんな事が2度も続いてしまった。初めは鬼の霍乱かと冗談を言って居たが、毎年となると健康の衰えが案じられた。万病の巣を抱いている私に酒井さんも近づいたかと思っていたら、暫く会わぬうちに倒れてしまい、再度立ち上がることはなかった。あんなにしぶとかったのに、案外にあっさりした幕切れだった。嘘のようである。

(たじめきょうじ：北海道大学名誉教授、元北海道地区部会長)